

シンポジウム「能登らしい暮らし・文化の復興の現局面と次のフェーズを考える ～令和6年能登半島地震から2年にあたって～」を開催しました（2026/2/27）

テーマ：令和6年能登半島地震・奥能登豪雨、能登の里山里海、復興知、復興農学、災害人文学

会場：東北大学災害科学国際研究所

URL：https://irides.tohoku.ac.jp/media/files/_u/topic/file/noto_fukkou_sympo_20260227.pdf

2026年2月27日（金）、シンポジウム「能登らしい暮らし・文化の復興の現局面と次のフェーズを考える～令和6年能登半島地震から2年にあたって～」を当研究所で開催し、震災から2年の総括と、今後の復興の展望を試みました。栗山進一所長・教授（災害公衆衛生学分野）が開会挨拶を行い、原裕太助教（2030国際防災アジェンダ推進オフィス）が趣旨説明と講演者紹介を行いました。農学と人文学に関わる学内外の研究者4名が講演し、当研究所エントランスではポスター展示も行われました。

本シンポジウムには石川県内の研究者や、当研究所、農学研究科、文学研究科、理学研究科、工学研究科、教育学研究科、環境科学研究科、グリーン未来創造機構の本学諸部局に所属する教員・大学院生など、学内外から約30名が参加し、FAO世界農業遺産に登録される能登地域の「能登らしい」暮らしの復興にむけて、活発な意見交換を行いました。

本シンポジウムは、2025年度東北大学災害レジリエンス共創研究プロジェクト（代表：山下良平（石川県立大学）、受入：原裕太）が主催し、当研究所、石川県立大学、本学災害科学コアリサーチクラスター災害人文学領域が共催しました。本学と石川県立大学などとの対話の場は、震災から約1年に合わせて金沢市内で開催した「石川×東北 研究者対話セミナー：能登の里山里海文化の復旧復興と継承を考える：東日本大震災の教訓から」（2024年12月15日・石川県政記念しいのき迎賓館）に続くものです。

【プログラム】

開会挨拶 栗山進一（当研究所長、災害科学コアリサーチクラスター長 教授）

趣旨説明・講演者紹介 原 裕太（当研究所 助教）

招待講演

- ① 山下良平（石川県立大学 生物資源環境学部 准教授）

「石川県「農村地域コミュニティ再生モデル集落支援事業」にみる能登農業の復興概観と、復興モデルの当為論」

- ② 加藤一幾（本学大学院農学研究科 准教授）

「福島県葛尾村における「復興農学」・「復興知」の教育・研究および園芸振興」

- ③ 後藤知美（国立文化財機構 文化財防災センター 研究員）

「無形民俗文化財被害状況調査・支援事業をとおしてみた能登の祭り
—祭り行事の被害/復興状況と今後の課題—」

- ④ 井川裕覚（本学大学院文学研究科 助教）

「災害復興に伴走する宗教者——能登半島地震後の寺院・僧侶の実践」

質疑応答

閉会挨拶 木村敏明（本学総長補佐、文学研究科長・文学部長、災害科学コアリサーチクラスター災害人文学領域長 教授）

（次頁につづく）

ポスター展示

- ① 小山明子（国連大学サステナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット（UNU-IAS OUIK） 研究員）
「2024 年能登地震および豪雨災害からの復興への道」
- ② 上野裕介（石川県立大学 生物資源環境学部 准教授）ほか
「能登のグリーンインフラ復興を考える研究会：産官学民金による里山里海の「創造的復興」とNbS・Eco-DRRの社会実装モデル構築」

など



登壇者の集合写真



開会挨拶（栗山所長）



講演（山下准教授）



ポスター展示の様子

文責：原 裕太助教（2030 国際防災アジェンダ推進オフィス）